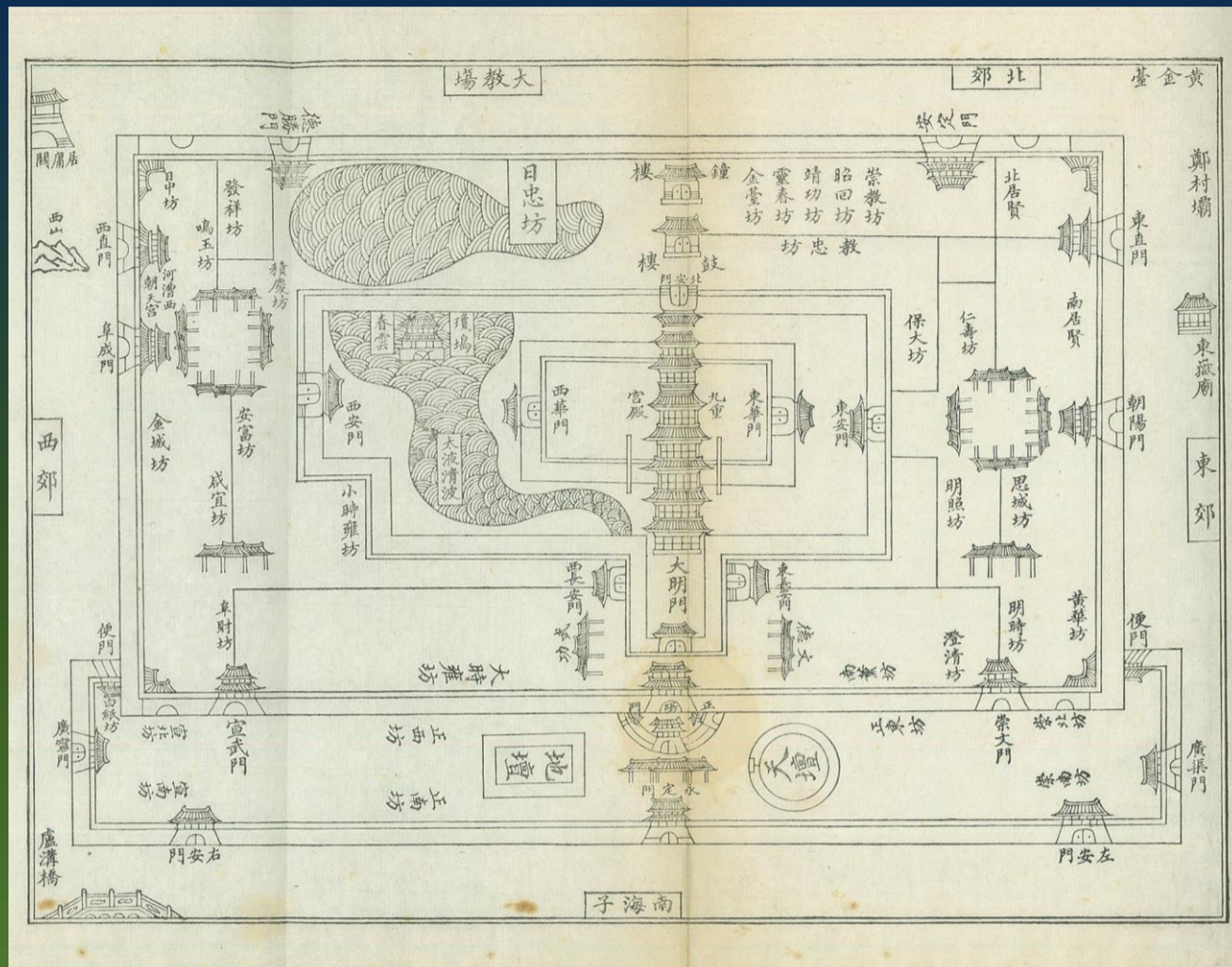


〈東文研・ASNET共催セミナー〉

北方都市の文学に息づいた命

— 明末の北京城と『帝京景物略』 —



明・張爵「京師五城坊巷衙集」(1560)

本報告は、1635年に成立した筆記小品である『帝京景物略』を中心に、明朝末期に南方の文人が、北京城の歴史的な位置づけを如何に書き記し構築していったのかについて論じる。国家の辺境に所在していた都の北京は、十七世紀以降、未曾有の危機に直面していた。にぎやかで風雅な江南と対照しながら、都に滞在していた士人は、「景物」を手掛かりとして、自発的に当地の歴史文化を系統的に整理し記述した。伝統的な都市記録の書と異なり、本書は多くの奇談逸話を記し、言葉が「幽深孤峭」であり、小品文学の模範であるとして、二十世紀初頭の学者から賞賛を受けた。そのようにして本書は、内包する「歴史性」が絶えず希釈されていったのに対して、「文学性」が徐々に強調されていくことになった。本報告は、『帝京景物略』の成立した明末に遡り、歴史記述の伝統における文学と史学の微妙な境界、及び(地理的な)境域における「詩文」記述の意義を探ってみたい。

◆ 日 時： 2018年6月28日(木) 17:00-18:00

◆ 報告者： 馮乃希氏(東京大学東洋文化研究所・訪問研究員)

◆ コメント： 大木康氏(東京大学東洋文化研究所・教授)

◆ 会 場： 東京大学 東洋文化研究所 1F ロビー

※ 報告は中国語で行われます(通訳付き)。



東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia

